

八%の範囲で増加。うちセグメント工具は十六ヵ月、研削ホイールは十三ヵ月、カッティングソーと切削工具は共に十ヵ月、ドレッサとその他は共に八ヵ月それぞれ続伸となった。

昨年十二月の超砥粒工具の品目別生産額は次の通り(単位百万円、カッコ内は前月実績、%は前年同月対比)。

◆ダイヤモンド工具▽ドレッサ四二八(四三三) 一・二・九%▽研削ホイール二、三三三(二、三四七) 一・五・七%▽カッティングソー四七六(四六二) 一・四・四%▽セグメント工具七四二(六七五) 一・五・〇%▽

切削工具九〇二(九三二) 一〇・九・三%▽その他五七〇(五四三) 一・六・八%▽合計五、四四一(五、三九二) 一・四・三%。

一方、カッティングソー、セグメント工具、そのほか、超砥粒工具計七、七〇二(七、五四二) 一・二・二・八%。

本に最適

ク新製品発売

粒ではなく、独自のセラミックファイバーを研磨材使用することで、耐久性向上。手で触れても怪我をしにくく、安全に使用できる。円盤ヘッド本体は、番手#二二〇相当(グレ一)で、サイズは砥石径の一四〇×厚さ二五、上限回転速度は毎分五千回転。専用シャフトは、シャフト径φ二・三、全長七八。

公益社団法人砥粒加工学会次世代固定砥粒加工プロセス専門委員会(SF委員会)は、四月二十二日午後一時から、都内羽田空港の羽田インベーションセンター内PICO PARKイベント会場とCisco Webex Meetingを用いたオンラインによるハイブリッド形式で、第二回研究会「研削加工にみるスマート化の最新技術」高度な研削加工を平動化、無人化への対応技術開発も急速に進められている。今回は昨秋に名古屋で開催されたメカトロニック2021に出展された最新技術をはじめ、国内で注目される最新技術について具体的に講演プログラムは▽これから研削加工のスマート化技術を考える▽清

4月 第102回研究会

砥粒加工学会SF委員会

「研削加工にみるスマート化の最新技術」高度な研削加工を平動化、無人化への対応技術開発も急速に進められている。今回は昨秋に名古屋で開催されたメカトロニック2021に出展された最新技術をはじめ、国内で注目される最新技術について具体的に講演プログラムは▽これから研削加工のスマート化技術を考える▽清

新耐熱鋳鋼2種を開発

ヒテホールと山形精密鋳造

ヒテホールディングス(本社・福岡県福岡市、社長・浦上紀之氏)は、このほど傘下の山形精密鋳造(株)(本社・山形県長井市、社長・木塚勝典氏)と共同で、耐熱変形性・き裂性、耐酸化性、経済性にすぐれた新しい耐熱鋳鋼2種を開発した。

自動車業界では、欧州市場を中心にEV化の動きがある一方で、当社は存続し続ける内燃機関の排気ガス低減や燃費の更なる向上が課題で、それに対応するためガソリン車の排気ガス温度は年々高まり、構成部品には一千五百度にもなる環境が求められている。

作することもあが、コスト面を考慮した場合、最終製品に近い形状(ニアネットトシェイプ)が製造でき加工手間が軽減できる鋳物の対応が理想で、その場合、一般的な鋳鉄は耐熱性が低いため、高温で使用される場所には鋳鉄よりも含有炭素量が低く耐熱性が高い鋳鋼をベースとした材料が使われる。鋳鋼を含めた種類・量、鋳造の方法により性質が異なり、耐熱性・耐酸化性のほか延性(伸び)・材料コストなど、使用部位に応じた理想的な材料が求められている。

両社では、開発した材料について今後、自動車以外の分野で耐熱性、耐酸化性、経済性が問われる船舶、産業機械、ケミカル装置、各種ポンプ用部品などに展開し、また最新鋭の開発・検証設備を用いてナノ・メソレベルで組織制御を行うことで、求められる条件に応じた材料開発も可能なことから、鋳物の持つ低環境負荷性、低コスト性などの幅広い可能性を追求、グループを挙げてユーザーの競争力向上に寄与していく。

カリキュラムの共同開発に向け産学連携大学院とSpace BD(社長・永崎将利氏)は、「宇宙利用」をテーマとした文理融合の学びと実践の場の提供を通じ、これからの社会で活躍する人材を輩出するためのカリキュラムの共同開発に向け協定書を締結した。

学習院大学が全学共通科目として23年度に開講する「宇宙利用論」のカリキュラムを産学連携で開発する。同利用論は、全ての天体を研究対象とした、同大

クレトイシの製品は、高性能・高能率・高精度な加工を可能にします。

